

コラム  
COLUMN

コロナ禍の先へ～挑戦者たち～

ジャズドラマー／KoToサウンド合同会社代表  
木曾稔之さん

プロのジャズドラマーとして活躍する傍ら、茨木で数々のイベントを企画・運営してきた。2018年には音楽イベント「Ibaraki Jazz & Classic Festival」で実行委員を務め、イベントの設計やミュージシャンの手配、飲食店との出店交渉などを担った。50人近くのプロミュージシャンが出演し、約3000人が訪れた。会場で80代と見える男性に呼び止められた。「本物のジャズを久しぶりに聴いた。自分の住んでいる町でこんな音楽が聴けるなんて思わなかった」。若い頃ジャズバーに通っていたという男性は、涙ながらにそう話し、礼を言ったという。地元で生演奏を必要としてくれる人がいる。そう強く実感した。

翌年には約4000人を集客。市街地での音楽イベントでありながら、周辺住民からのクレームはゼロ。訪れた人からも好評で、3年目も開催するはずだった。

そこへコロナが直撃した。昨年2月には企画していた他のイベントもほぼ中止。自らが演奏する機会も減っていき途方に暮れた。SNSには多くのミュージシャンの悲痛的な叫びが書かれ、実力があるにもかかわらずプロになるのをあきらめる若者もいた。

音楽は心や時間に余裕がなければ聴きに来てもらえない。自分の演奏はともかく、まずは日常生活に不安がない状況を作る方が先だと考えた。

コロナ前の2019年夏、京都のライブハウスで演奏する木曾さん。



国や市からの給付金などを運転資金に、町の活性化に力を注いだ。緊急事態宣言を受け、休業要請が出た翌日の4月15日には、茨木専用の宅配サービス「イーパーツ」を立ち上げた(現在、宅配は終了)。メディアにも取り上げられ、地元の人からは「何とかなんと希望になった」と言われた。昨年7月には市役所のレストランで、生演奏付きのビアガーデン「いばのみ!」を実施。地元飲食店が出店し、満席になる日もあった。さらに今年1月、2度目の緊急事態宣言が出され、午後8時以降の店内飲食が制限されたときには、テイクアウト情報などが閲覧できる地図アプリ「いばらき街ごはん」を開発。現在、利用者は約2500人に上る。

現在は、大学生らと協力しながら学生の居場所や町の人と交わる場づくりに取り組んでいる。コロナをきっかけに新たなつながりができたという木曾さん。逆境をバネに、町の未来を見据えている。

コラム  
COLUMN

梅花から「令和」を込めて

努力を測る尺度

自身の努力を誰かに伝えようとする時、どのような例え話をしますか?『万葉集』巻十六には、次のような歌が残されています。

このころの我が恋力記し集め

功に申さば五位の冠

比来之 吾恋力 記集

功尔申者 五位万冠

(巻16・3858番歌)

「近頃の私の恋の努力を、(あれもした、これもしたと)書き集めて成果を報告申し上げるなら、五位の冠(に相当します)」と詠んでいます。「考課令」という法律には、一年毎の人事考課が義務づけられています。功績や過失、行動や能力を、本人に伝えることが求められていました。評価は九等。奈良の都に1万人の官人が働いていたら、五位以上は100人程度です。給与も待遇も、六位以下と大きく異なりました。とはいっても、現実には父親の官位が子の昇叙に影響を及ぼし、努力だけではなれるのは稀なことでした。

同じ人が続けて詠んでいるのでしょうか。「近頃の私の恋の努力に見合う(評価を)くださらないのでしたら、しかるべきところに外かけて訴えましょう」

このころの我が恋力賜はずは  
京兆に出でて訴へむ

頃者之 吾恋力 不給者

京兆尔 出而將訴

(巻16・3859番歌)

「京兆」は、司法・行政・警察などを掌った官庁を指します。もちろん、恋の努力を判断してくれる所など、あろうはずがありません。

六位以下の官人が、五位以上への憧れと、恋への努力を重ねて詠んでいるようです。思う人に贈ったら、「よく頑張ったわね」と褒めてもらえたのでしょうか?仕事も恋もそれなりに成果が上がらないと、厳しいような気もします。それとも、仕事帰りに男同士で飲んで、恋愛話に「がんばってる、オレ…」と、くだをまいたのでしょうか。いずれにせよ、仕事に恋に抱く思いを、五七五七七の短歌で表現したところが芸であり、共感を得て書き残されたのだらうと思います。

TEXT

梅花女子大学教授 市瀬 雅之

現代訳から原文までを用いて『万葉集』に文学を楽しむほか、『古事記』や『日本書紀』等に日本神話や説話、古代史をわかりやすく読み解く。中京大学大学院修了 博士(文学)。著書に『大伴家持論 文学と氏族伝説』おうふう 1997年、『万葉集編纂論』おうふう 2007年、『北大阪に眠る古代天皇と貴族たち 記紀万葉の歴史と文学』梅花学園生涯学習センター公開講座ブックレット 2010年。ほか執筆・講演・講座多数

エスディー  
ジーズ  
SDGs

「ヘッドネーション」に  
“女性が働きやすい職場”  
SDGs先進国で刺激を受けて開始

北摂地域の企業の「SDGs」に対する取り組みを実際に取材してきました。

茨木・高槻でヘアサロン4店舗を経営する「髪創(はっそう)」。社長の中村禎二さんと妻であり取締役のひとみさんは、2年前に人材育成の研修の一環でSDGs先進国のスウェーデンに行ったことをきっかけに、SDGsの重要性を感じ、帰国後すぐにできることから取り掛かったという。

研修旅行で訪れたスウェーデンはSDGs達成度1位。「保育園や小学校に行く子どもたちは、日本では考えられないくらい細かくゴミを分別していました」。当時の日本ではSDGsという単語を聞いても首をかしげる人の方が多かった時期、スウェーデンでは子どもたちまで浸透していることに驚いた。町を走るバスやタクシーはバイオ燃料が用いられ、人が多い場所では人の熱を集めて回す風車で発電していた。日本との差に驚いた2人は「小

さなことでも、何か始めなければ」と決めた。

帰国後まもなく、使い終わったカラー剤のチューブを回収し、車いすを購入する活動をしている理容院があることを知った。さっそく協賛を決め、機会があれば知り合いの同業者にも伝えている。また同時期にヘッドネーションも開始。カット料金のみで送料などは自己負担して実施する。最近では子どもの希望者が多いのだという。「学校でSDGsをしっかり学んでいるのですね」とSDGsの浸透を実感している。

いま力を入れているのは女性が活躍できる職場づくりだ。「子どもができてと辞めてしまふ“休眠美容師”の方に、働ける場を提供したい」とひとみさん。パートで週1回からでも働けるよう環境を整え、3、4年前には産休・育休明けや子育てを終えた女性のためのスタッフが働く「ママさんサロン」をスタート。早ければ17時半閉店、美容院が最も忙しいはずの日曜・祝日を休みにする、という思い切った決断をした。「女性ばかりなので



PROFILE

中村 ひとみ さん

「有限会社髪創」取締役。社長であり夫の禎二さんとともに高槻、茨木でヘアサロン4店舗を経営。人材育成の講習の一環として行ったスウェーデンでSDGsの重要性を認識。いまでは私生活や店づくりでもSDGsを意識するように。



「ジェンダー平等を実現しよう」

育休・産休明けの女性が働きやすい職場「ママさんサロン」を運営。日曜・祝日休みで短時間でも働ける場を提供している。

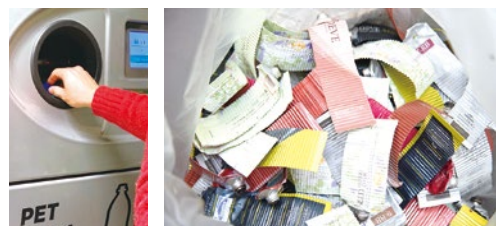
「つくる責任つかう責任」

使用済みのカラー剤をリサイクルするプロジェクトに参加。

『安心できる』とか『同じ悩みを抱えているので話しやすい』という言葉もいただいています」と、女性ならではの雰囲気や「子育てサロン」のような場を求めてくる人もいます。『私も子育てしながら働くのが大変だったので、少しでも働きたい人が活躍できる場所が作りたいですね』とひとみさんは話す。



人材教育では独自のカリキュラムをつくり、月1回の講習会で講義やワークショップ、プレゼンなどを組み込み、スタッフ自身の人間性を高めてほしいと考えている。



(左)「スウェーデンのペットボトル回収機を利用すると、植樹用に寄付をするかスーパーで使えるレシートのどちらかを選べます。子どもがレシートを持っていくとお菓子が買えるんですよ」とひとみさん。  
(右)使用済みのカラーチューブはキャップと分別。車椅子にリサイクルされて介護施設などに贈呈される。



小児がんなどで頭髪を失った子どものための医療ウィッグで使う髪を提供するボランティア「ヘッドネーション」。



SDGsとは「持続可能な開発目標」のこと。2015年の国連サミットで採択された、2030年までに持続可能でより良い世界を目指す国際目標だ。地球上で「誰一人取り残さない」社会を実現するため、17の目標と169のターゲットを設定している。